

3回目のケニア・ウガンダ訪問に参加して 鈴木 信弘

昨年に引き続き、ケニアを訪問する機会にめぐまれました。正確に言うと、ケニアとウガンダの2国の訪問になりました。岡山大学・資源植物科学研究所から3名（本プロジェクトのリーダーの坂本亘教授+Ivan Galis 教授+筆者の鈴木信弘）と JKUAT から参加した Hunja Murage 教授の4名がウガンダのマケレレ大学を訪問し、その後ナイロビ空港で岡山大学から参加の4名（環境生命科学研究所長・神崎 浩+久保康隆教授+M1の岡本君）が合流し、Juja市のジョモケニアッタ農工大学（JKUAT）を訪問しました。下にそれらの報告書を添付致します。

ウガンダのマケレレ大学は空港のあるエンテベから車で1時間くらいの距離だったかと思えます。首都のカンパラ近郊の渋滞を差し引くと30キロくらいの距離だったかと思えます。宿は大学のゲストハウスに取り、到着日の10月14日から3泊しました。到着日翌日にはワークショップ”Crop Stress



マケレレ大学でのワークショップ風景

Science and Innovation for Agriculture”に参加しました。植物研から参加した3名の他、JKUAT,マケレレ大学の教員3名が持ち時間35分の中で講演しました。筆者は「From Virology to Plant Disease Control」と題して、植物ウイルスあるいはウイルス遺伝子を使い植物をウ



マケレレ大学 Tugume 博士の居室にて

ウイルス病から防除できる例、菌類ウイルスを使った植物糸状菌病の防除の例を紹介しました。マケレレ大学の職員、学生を中心に50名程度の聴衆がいたと思います。彼らに理解してもらったかどうかは不明です。筆者らの一行には、以前Galis教授の研究室に2ヶ月滞在したシプリアン・オシンデ君も参加してくれて、案内役、ホスト役も担ってくれました。

翌日は、ナムロンゲという隣接する市にあるウガンダ国立農業研究機構(NARO)傘下の国立作物資源研究所(NaCRRI)を訪問しました。所内にあるJICAが運営するイネ研究・研修センター(RRTC)では、センター長相当の八木和彦博士、吉野 稔専門員からrice yellow mottle virus耐性イネの育種の説明やアフリカの野生イネの説明を受けました。また、NaCRRIにはつい最近まで岡山大学のあるいは岡山大学出身の学生が長期に研究活動をしていたとのことでした。学生にとっては、英語圏の環境で研究に打ち込めてメリットが大きいような気がします。また、長期滞在用の宿泊施設、さらには食堂もあるのでそんなに大きな困難もないのではと思います。



NaCRRI 実験圃場にて

16日は、植生調査でヴィクトリア湖に浮かぶNGAMBA島を訪問しました。ここには京大の研究室も研究活動を行っていました。この島にはチンパンジーの保護区もあり、1日1頭あたり3米ドルかかるとのことでした。半年になる赤ちゃんチンパンジーもいて名前を募集していました。募集にも寄付を要求されますが、興味ある方は下記サイトで赤ちゃんチンパンジーの写真や応募方法などがご覧になれます。

<http://ngambaisland.org/ngamba-island/our-chimpanzees/>

翌日にはケニアのナイロビまで飛んで、JKUATキャンパス内にある宿泊施設に3泊しました。JKUATでも19日にワークショップ”Innovations for Harnessing Bio-resources”が企画されており、マケレレ大学のワークショップと同じ話題で話しました。ワークショップはJICAのAIプロジェクトでは日本からの研究者5名の他にケニア人研究者3名による講演がありました。聴衆は50人を超え、活発な議論もあり盛況のうちに終わりました。筆者は3年前そして昨年とJKUATを訪問していて、カンファランスにも参加した経験があります。今回は驚いたことに、ワークショップの運営が時間通りに進行したことです。3年前にはあんなに時間にルーズだったのに、大きく違っていました。こちらが発表時間を守らなければと強く思われるくらいプレッシャーを感じました。

19日の午後、ワークショップを終えてからはナイロビ近郊のケニア国立農業・畜産研究機構(KALRO)を訪問する機会に恵まれた。そこでは、既に植物研で短期滞在の経験のあるJane Wamaitha Mwathi博士と来年短期滞在で訪日予定のCyrus Mugambi Micheni氏がKALROを案内してくれた。研究所は歴史も古く、また広大なキャンパスであった。彼らが携わっているトウモロコシのウイルス病抵抗性の選抜試験を見せてくれた。

植物研メンバーにとっては最終日前日となる20日には恒例となっているニヤマチョマを囲んで親交を深めました。近くのホテルのレストランでしたが、グリルで焼き上げた羊肉、トウモロコシ粉を固めたウガリなどを囲んで楽しい東アフリカ最後の夜を過ごしました。この会にはJICAプロジェクトの角田、岡山大学出身の塩見さん、田中さん、ヨゼフ（植物研の滞在経験があるエチオピア人）を含め大人数となりました。それぞ



KALROにてウイルス耐性トウモロコシの選抜試験を見学

れ、いろんな経緯でケニアに住んでいたたり、訪問したりする人たちの集まりでした。

ケニア最終日はナイロビのJICAオフィスを表敬訪問しました。来年TICADがケニアで開かれるとのことで、安倍総理も出席されるとのことでした。

植物研のメンバー3人とケニアからの留学生1名を加え、10月21日ナイロビを飛び立ち、無事倉敷には翌日に到着しました。

末筆ながら、訪問の機会を与えてくれた日本学術振興会拠点形成事業（アジア・アフリカ型）によるプロジェクトとして「汎アフリカ大学院と協働する資源植物科学イノベーション研究（コーディネーター：坂本亘）」に感謝します。